

Title	E. メチニコフ 『楽観的世界観論考』 に対する森鷗外自筆施線部翻刻及び翻訳
Sub Title	
Author	新井, 正人(Arai, Masato)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12) ,p.222(41)- 242(21)
JaLC DOI	10.14991/002.20201200-0222
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0222

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E. メチニコフ『楽観的世界観論考』に対する 森鷗外自筆施線部翻刻及び翻訳

新井 正人

I. 解題

本稿は、森鷗外旧蔵 Elias Metschnikoff, *Beiträge zu einer optimistischen Weltauffassung* (初版, München: J.F. Lehmann, 1908年刊, 309頁, 東京大学総合図書館所蔵) に対する鷗外自筆施線部の翻刻と当該本文の翻訳である。本書『楽観的世界観論考』は、仏語原著 *Essais optimistes* (初版, Paris: A. Maloine, 1907年刊) からの、ハインリヒ・ミハルスキー (Heinrich Michalski) による独訳版として刊行された。

なお、鷗外旧蔵本には、エリー・メチニコフ (イリヤ・イリイチ・メチニコフ, 1845-1916) の著作として、『楽観的世界観論考』の他に『人性研究』、すなわち *Études sur la nature humaine: essai de philosophie optimiste* (初版, Paris: Masson, 1903年刊) の独訳版である *Studien über die Natur des Menschen: eine optimistische Philosophie* (第2版, Leipzig: Veit, 1910年刊, viii+339頁, 東京大学総合図書館所蔵) がある。

鷗外のメチニコフ受容については、既に小堀桂一郎による考証が存在する⁽¹⁾。小堀は、ともに1910 (明治43) 年頃購読されたと推定される『人性研究』『楽観的世界観論考』のうち、特に小説「妄想」(『三田文学』1911.3-4) 生成への影響に焦点化する形で『人性研究』受容の様相を明らかにした。一方、『楽観的世界観論考』がどのように読まれたのかについては詳らかでない⁽²⁾。だが本書には、精読されたことを示す数多くの施線が残されており、それは明治末年における鷗外の関心の所在、思考のありようを具体的に示すものである。本稿では、すべての施線部を翻刻・翻訳し、『楽観的世界観論考』繙読の全容を可視化する。

本書は全9章より成り、それぞれの章が3つ～5つの節に分かれている。以下に本書の章立てを示す。なお、原著の章題には番号が振られていない。以下の章番号は稿者が便宜的に付与したものである。

Über das Altern. 第1章：老化について

Die Lebensdauer im Tierreich. 第2章：動物界における寿命

Studien über den natürlichen Tod. 第3章：自然死についての研究

Soll man versuchen. Das Leben der Menschen zu verlängern?

第4章：私たちは寿命の延長を試みる必要があるか？

Die psychischen Rudimente des Menschen. 第5章：人間の心的原基

Über einige Punkte in der Entwicklungsgeschichte der tierischen Gesellschaften.

第6章：動物社会の進化史における諸点

Pessimismus und Optimismus. 第7章：悲観主義と楽観主義

Goethe und Faust. 第8章：ゲーテとファウスト

Wissenschaft und Moral. 第9章：科学と道德

本書への書き込みはすべて赤鉛筆による⁽³⁾。文字等の書き入れはなく、ほぼ本文への下線である（一部、本文横への施線も見られる）。後掲の表から判るように、「老化について」（第1章）、「動物界における寿命」（第2章）、「自然死についての研究」（第3章）、そして「人間の心的原基」（第5章）の各章には書き込みがない。

本書は、健康長寿とその先の幸福な自然死を人類が実現すべき目標と捉え、その方途を科学的に考究している。だが、本書の射程はそうした点にとどまるものではない。いわゆる自然科学の知見のみならず、哲学や文学といった人文知をも汎く参照し、健康長寿と自然死の実現が、いかに倫理のあり方を更新し、人々や社会のありようを変容させていくのか。こうした問題に対する展望を示すことに本書の眼目があるからだ。

「メチニコフの「老い」をめぐる言説の独自性とは、同時代の思潮への開かれた問題意識と個々の学説を総合的に捉える学問的営為の包括性⁽⁴⁾にある」とも指摘されるが、それを端的に体现しているのが本書であると言える。そして、書き込みの様相からは、本書を繙読した鷗外が、老化や死をめぐる個々の学説への興味というより、新たな人間像や世界像を示唆するものとして本書を受容したさまが見て取れる⁽⁵⁾。

しかしながら、鷗外が本書をどのように読み、それが鷗外の思考や言説と如何なる関係にあるのか、仔細に検討することは本稿の範囲を超える。それらについては、別稿を期さなくてはならない。

なお、鷗外旧蔵書の閲覧に際しては、東京大学総合図書館にご高配いただいた。記して感謝申し上げる。

(1) 小堀桂一郎『森鷗外の世界』（講談社、1971.5）、同「森鷗外とE・メチニコフ」（吉田精一・福田陸太郎監修、長谷川泉編集『比較文学研究 森鷗外』朝日出版社、1978.10 初出：『鷗外』7号、1970.12）

(2) ただし近年、山口徹は、本書における「ゲーテとファウスト」の章に着目し、そこに「老ファウストの人生観やその楽天主義（中略）に関する論述が認められることは、従来看過されていた「妄想」とゲーテ『ファウスト』との繋がりを示すだけでなく、鷗外の知的関心の配置と質とを

図りなおすポイントの一つ」であると指摘している（『鷗外「妄想」周辺—ファウスト受容と作品生成』『鷗外』102号、2018.1、40頁）。

- (3) 幸田成友『大鹽平八郎』（東亜堂書房、1910.1）への書き込みなど、本書と比較的近い時期に購読された他の蔵書にも赤鉛筆による施線の例が散見されること、また施線箇所が、倫理や社会思想をめぐる同時期の鷗外の関心と照応することから、本書への書き込みは鷗外自身によるものと判断される。なお、後者については別稿にて詳論する予定である。
- (4) 島田雄一郎「明治末から大正期におけるメチニコフの「老い」をめぐる言説の受容」（『老い—人文学・ケアの現場・老年学』ポラーノ出版、2019.3）、262頁。
- (5) 鷗外が有していた、人々や社会のありようの更新への志向については、拙著『鷗外文学の生成と変容—心理学的近代の脱構築』（七月社、2020.6）を参照のこと。

Ⅱ. 施線部原文・訳文対照

《凡例》

1. 鷗外自筆の施線部をすべて掲げた。
 - a. 原本位置を算用数字で示した。例えば、71/8 とある場合、当該部（施線部を含む一節）が原本71頁8行目から始まることを示す。
 - b. 隔字体はイタリック体で表記した。
 - c. 語句への下線は、原文に鷗外による下線が施されていることを示す。
 - d. 必要な注記を〔 〕内に付した。
2. 施線部の訳文を掲げた。
 - a. 訳文は拙訳による。翻訳にあたり、ともに仏語原著からの訳本である平野威馬雄訳『長寿の研究：楽観論者のエッセイ』（幸書房、2006年6月刊）、及び中瀬古六郎訳『不老長寿論』（大日本文明協会、1912年10月刊）を参照した。なお前者は、戦時下に刊行された旧著『長寿の科学的研究』（科学主義工業社、1942年7月刊）の改題復刻版である。そのため、出版当時の時局を考慮してか、「動物社会の進化史における諸点」（第6章）における社会主義関係の叙述が大幅に削除されている。
 - b. 本書における鍵語の一つ Lebenssinn については、一般に邦語では「人生の意味」や「存在意義」と訳されることもあるが、本稿では文脈を考慮し「生の意味の感覚」とした。

（あらい・まさと）

原本位置	原文	訳文
	<p>Soll man versuchen. Das Leben der Menschen zu verlängern?</p> <p>II.</p> <p>134/20 Diese Methode, die man später mit dem Namen <u>Gerokomie</u> bezeichnete,</p> <p>136/25 wollte der berühmte Physiologe durch <u>Emulsionen, die aus Tierhoden</u> (von Hunden und Meerschweinchen) <u>bereitet waren</u> und unter die Haut eingespritzt wurden, dem abhelfen.</p> <p>137/9 Im Gegensatz zu ihm rühmten andere Gelehrte gerade diese Substanzen, und vor allem ein organisches Alkali, von dem ein Salz unter dem Namen <u>Spermatin</u> bekannt ist.</p>	<p>私たちは寿命の延長を試みる必要があるか？</p> <p>II.</p> <p>この方法〔ダビデ王が用いた回春延命法〕は後に<u>ゲロコミー</u>と呼ばれ、</p> <p>この有名な生理学者〔ブラウン・セカール〕は、<u>動物の睪丸</u>（犬やモルモット）から調製した乳剤を皮下に注射することによって、これ〔老衰〕を改善したいと考えていた。</p> <p>彼〔セカール〕とは対照的に、他の学者たちは、これらの物質〔睪丸の抽出物〕、特に有機アルカリ、すなわち<u>スペルミン</u>の名で知られている塩のみを支持した。</p>
	<p>Über einige Punkte in der Entwicklungsgeschichte der tierischen Gesellschaften.</p> <p>III.</p> <p>214/7 aber auch in dieser leistet er eine für die Allgemeinheit nützliche <u>Arbeit</u>.</p> <p>214/13 Wir gelangen also zu dem Resultat: eine je höhere <u>soziale</u> Organisationsstufe ein Lebewesen erreicht hat, desto entwickelter ist auch seine Individualität.</p> <p>215/3 Seit mehr als einem Jahrhundert machen sich die</p>	<p>動物社会の進化史における諸点</p> <p>III.</p> <p>しかし、ここ〔子をなさない時期〕でも人は共同体に貢献する<u>仕事</u>をしている。</p> <p>だから私たちは、生物の社会的な組織の水準が高いほど、その個性が発達しているのだと結論する。</p> <p>一世紀以上にわたり、さまざまな社会主義理論は、全人類を幸福にする権利を争</p>

verschiedenen sozialistischen Theorien das Recht streitig, die ganze Menschheit glücklich zu machen.

215/8 So hat der Sinn des Wortes Sozialismus selbst so verschiedene Erklärungen erfahren, daß es schwierig geworden ist, es überhaupt noch zu gebrauchen. Obgleich mehrere der kollektivistischen Theorien viel von ihrer ursprünglichen Intransigenz verloren haben, denken sie noch lange nicht daran, in genügendem Maße die Selbständigkeit des in der Gesellschaft lebenden Individuums anzuerkennen.

216/3 Das sind nun aber die Anarchisten, die, während ihr Ziel die Freiheit des Individuums ist, sich nicht scheuen, das Eigentum und selbst das Leben ihrer Gegner anzutasten.

216/15 Kautsky

216/27 Es ist aber sehr schwierig, ein Privathaus ohne einen Garten anzunehmen, besonders wenn man den Freuden des Lebens Rechnung tragen will.

217/1 Herbert Spencer

217/10 Er sieht Sklaverei als Resultat der zu großen Einmischung des Staates in die Funktionen, die durch die individuelle Initiative erfüllt werden sollen.

217/15 Mit seiner gewöhnlichen Übertreibung kritisiert Nietzsche den Sozialismus. „Der Sozialismus ist der phantastische jüngere Bruder des fast

uttkita.

このように、社会主義という言葉の意味自体が種々に説明されてきたため、この言葉を用いることすら困難であり、集産主義の理論のいくつかは、元来のこだわりを大きく失っているが、社会に生きる個人の独立性を十分に認識しようとは未だ考えていない。

しかし、こうした人々は無政府主義者であり、彼らの目的は個人の自由であるが、反対者の財産や生命に触れることさえいとわない。

カウツキー

しかし、特に生活の楽しみを享受したい場合、庭のない民家を受け入れることは非常に困難である。

ハーバート・スペンサー

彼〔スペンサー〕は奴隷制を、個人の主体性により果たされるべき機能に国家が過度に干渉した結果であると見ている。

ニーチェはいつもの大げさな言い方で社会主義を批判する。「社会主義は、死に瀕した専制主義の継承を望んでいる、その常軌を逸した弟である。この熱望は最

abgelebten Despotismus, den er beerben will; seine Bestrebungen sind also im tiefsten Verstande reaktionär. Den er begert eine Fülle der Staatsgewalt, wie sie nur je der Despotismus gehabt hat, ja er überbietet alles Vergangene dadurch, daß er die förmliche Vernichtung des Individuums anstrebt, welches ihm wie ein unberechtigter Luxus der Natur vorkommt und durch ihn in ein zweckmäßiges Organ des Gemeinwesens umgebessert werden soll“.

217/35 Indessen, der Fortschritt des menschlichen Wissens muß notwendigerweise eine größere Gleichheit der Vermögen herbeiführen, als sie heute existiert.

218/6 Die Idee, daß das größte Glück in der vollständigen Zurücklegung des normalen Lebenskreislafs liegt, und daß dieser Zweck leichter erreicht werden kann durch ein bescheidenes und nüchternes Leben, wird von der Nutzlosigkeit so vielen Luxus überzeugen, der heute das Dasein abkürzt.

Pessimismus und Optimismus.

I.

219/5 Wenn man versucht, eine optimistische Theorie der Natur des Menschen aufzustellen, ist es ganz natürlich, sich zu fragen, aus welcher

も深い意味で反動的である。というのも、社会主義は、かつて専制主義が有していたような豊富な国家権力を望み、自然の不当な贅沢のように見える個人を完全に消滅させようとする努力は過去のすべてを凌駕しており、それを通して個人を共同体の機能的な器官に変えようとしているのである。』

しかし、人間の知識の進歩は、必ずや現在よりも大幅な富の平等をもたらすに違いない。

最大の幸福は正常なライフサイクルを完遂することであり、この目的は謙虚で落ち着いた生活を通じてより容易に達成できるのだという考えは、今日、人命を短縮させているあまたの奢侈の無用を私たちに納得させるだろう。

悲観主義と楽観主義

I.

人間の性質について楽観的な理論を立てようとするとき、なぜこれほど多くの優秀な人々が純粋な悲観的世界観に固執してきたのかと不思議に思うのは当然のこ

Ursache so viele hervorragende Männer bei einer rein pessimistischen Weltanschauung verharren.

219/13 Salomon

219/17 Budda

219/28 Bhartrihari

220/18 die Philosophie des Hegesias

220/29 Man gab Hegesias den Namen Pisithanates, das heißt Ratgeber des Todes.

220/33 König Ptolemaeus

221/1 Seneka

221/6 Neben den philosophischen Theorien des letzten Jahrhunderts den Theorien Schopenhauers, von Hartmanns und Mainländers, von denen in meinen „Studien über die Natur des Menschen“ hinreichend gesprochen wurde, haben vor allem die Dichter eine pessimistische Lebensanschauung entwickelt.

221/11 Voltaire

221/18 Byron

221/21 Giacomo Leopardi

222/9 Heine und Nikolaus Lenau

222/12 Pschkin und Lermontoff

222/30 Frau Ackermann

223/30 Man ging sogar so weit, Vereine der Freunde des Selbstmords zu gründen.

II.

224/24 Shakespeare

224/30 Byron

225/5 Heine

とである。

ソロモン

ブッダ

バルトリハリ

ヘゲシアスの哲学

ヘゲシアスにはピシタナトス、すなわち死の顧問という名が与えられた。

プトレマイオス王

セネカ

私の『人性研究』で十分に言及されている前世紀の哲学説たるショーベンハウア 二、フォン・ハルトマン、マインレンデルの理論に加えて、特に悲観的な人生観を展開したのは詩人たちであった。

ヴォルテール

バイロン

ジャコモ・レオパルディ

ハイネとニコラウス・レーナウ

プーシキンとレールモントフ

アッケルマン夫人

ある人々は、自殺の友の会を設立するところまでいった。

II.

シェークスピア

バイロン

ハイネ

225/15 Leopardi

226/25 Ed. v. Hartmann

227/3 Von dem Bestreben geleitet, so weit wie möglich die psychischen Vorgänge zu messen und zu beschreiben, hat der deutsche Philosoph Kowalewsky in Königsberg neuerdings den Versuch einer bis ins einzelne gehenden psychologischen Analyse des Pessimismus gemacht.

227/14 Münsterberg

228/28 Die so festgestellte Einheit bezeichnet er mit dem Terminus „Gustie“.

III.

231/30 Sowie sie aber erkranken, werden sie traurig, melancholisch, bis zum Augenblick der Heilung.

231/36 Wir haben erlebt, daß der Pessimismus Byrons auf seinen Klumpfuß zurückgeführt worden ist und der Leopardis auf seine Tuberkulose.

232/9 Die neuen historischen Untersuchungen Dr. Ivan Blochs machen sehr wahrscheinlich, daß Schopenhauer in seiner Jugend die Syphilis erworben hat:

232/21 Es ist allgemein bekannt, daß die Blinden sich oft einer fortwährend guten Stimmung erfreuen, und sogar unter den Aposteln des Optimismus trifft man den Philosophen Düring, der in seiner Jugend das Augenlicht verlor.

レオバルデイ

エドゥアルト・フォン・ハルトマン

心的過程を可能な限り測定・記述したいという欲求に導かれて、ケーニヒスベルクのドイツ哲学者コワレフスキーは、最近、悲観論の詳細な心理学的分析を試みた。

ミュンスターベルヒ

このようにして〔味覚が快不快を感じる物質ごとの最少量の決定〕識別された単位は「グスティ」と呼ばれた。

III.

だが病気になるとすぐに、治る瞬間まで悲しく、憂鬱になる。

パイロンの悲観主義は内反足のせいであり、レオバルデイのそれは結核のせいであるとわかる。

イワン・ブロッホ博士の新たな歴史研究によると、ショーペンハウアーが青年期に梅毒に罹患した可能性は非常に高い。

盲目の人が往々常に良い気分を楽しんでいることはよく知られているが、楽観主義の布教者の中にも、若い頃に失明した哲学者デューリングが見出される。

232/25 Andererseits ist bemerkt worden, daß Personen, die unter chronischen Krankheiten leiden, sich oft durch ihre optimistische Lebensauffassung auszeichnen, während junge Leute in voller Lebenskraft traurig und melancholisch werden und sich dem finstersten Pessimismus hingeben.

232/29 Dieser Kontrast ist von Emile Zola in seinem Roman „La joie de vivre“ sehr gut geschildert worden.

233/19 Um einiges Licht über diese Frage zu verbreiten, ist es zweckmäßig, den Seelenzustand eines Pessimisten genauer zu analysieren.

239/14 Man hat oft gefragt, wie es zu erklären wäre, daß Schopenhauer, dessen Philosophie sicherlich durchaus aufrichtig war, der die Rückkehr in das Nirwana predigte, am Schluß seines Lebens so leidenschaftlich hat am Dasein hängen können, anstatt seinen Tagen ein Ende zu setzen wie es später Mainländer getan hat.

242/35 Man spricht bei ihnen von einem sechsten Sinn, oder vom Sinn für Hindernisse.

243/35 Der „Lebenssinn“ ist gewissermaßen in diese Kategorie zu rechnen.

Goethe und Faust.

I.

245/8 Aus mehreren Gründen fiel

他の場合に、慢性的な疾患に罹っている人は楽観的な人生観を持つことが多いのに対し、活力に満ちた若者が悲しく憂鬱になり、最も暗い悲観主義に耽っているということが認められる。

この〔慢性病者と若者の〕対比は、エミール・ゾラの小説『生きる喜び』の中で非常によく描かれている。

この〔悲観主義を不健康によっては説明できない〕問題に光明を得るためには、悲観主義者の心的状態をより詳しく分析することが有用である。

その哲学は確かに真摯であり、涅槃への回帰を説いていたショーペンハウアーが、なぜ、後にマインレンデルがそうしたように自ら死を選ぶのではなく、彼の人生の終りに生に執着したのかということをいかに説明できるのかというのは、しばしば人の問うところであった。

彼ら〔盲目の人〕には第六感、或いは障害物の感覚があると言われる。

「生の意味の感覚」はある程度この部類〔特別なときに現れる人間の感覚〕に含まれる。

ゲーテとファウスト

I.

ゲーテを選んだ理由はいくつかある。

meine Wahl auf Goethe.

247/1 Dieser Seelenzustand fand seinen besten Ausdruck in den „Leiden des jungen Werther“,

251/29 Meistens empfand er Freude an seinem Dasein, und der Lebenssinn äußerte sich unter anderm in seiner Furcht vor dem Tode.

253/15 Also erst nach seinem vierzigsten Jahr trat Goethe in die optimistische Phase seines Lebens.

II.

254/6 In seiner Jugend hatte er einen starken Blutsturz gehabt, der wahrscheinlich tuberkulösen Ursprungs war, und während seines ganzen Lebens war er mehr oder weniger ernstesten Störungen unterworfen, wie Gicht, Koliken, Nierenleiden, Darmentzündungen usw.

256/9 Unter einer großen Anzahl bekannter Kastraten erwähnt man nur einen einzigen Dichter, Abelard.

260/1 Jeder kennt das Temperament Viktor Hugos und seine Neigung zum weiblichen Geschlecht bis zum Ende seines langen Lebens. Neuerdings, nach dem Tode Ibsens, haben die Enthüllungen über seine Liebe zu Fräulein Bardach, die sein Genie während der letzten Zeit seines Lebens inspirierte, großes Aufsehen erregt.

260/9 Ein genialer Philosoph, Schopenhauer, schrieb im Alter von 25

この心の状態〔厭世家としてのゲーテの心情〕は『若きウェルテルの悩み』の中に最もよく描かれており、彼〔ゲーテ〕は大抵生存の喜びを感じ、生の意味の感覚はとりわけ死の恐怖の中に現れた。

ゲーテが人生の楽観的な段階に入ったのは、40歳以降のことだった。

II.

青年期にはおそらく結核性のものである重度の吐血に見舞われ、生涯を通じて、多かれ少なかれ、痛風、疝痛、腎臓病、腸炎などの重篤な疾患を抱えていた。

多くの有名な去勢された男の中で、ただ一人詩人としてその名が残るのがアペラールである。

ビクトル・ユーゴーの気質や長い人生の最後まで女性に執着したことは誰もが知っている。さらに最近では、イプセンの死後、晩年の天才を鼓舞したパルダッハ嬢への愛が発覚して大きな波紋を呼んだ。

独創的な哲学者ショーペンハウアーは、最も充実した性生活を送っていた時期で

Jahren, also zu einer Zeit des erregtesten Geschlechtslebens, folgende Bemerkung nieder:

V.

278/5 Mir scheint vielmehr daß nach Goethes Faust der Mensch einen großen Teil seines Lebens der vollen Entwicklung seiner Individualität widmen soll, und es erst in der zweiten Hälfte seines Lebens, wenn er durch Erfahrung gereift ist und als Individuum sich genug getan hat, dem Wohl der Menschheit weihen soll.

278/25 Aber wovon er nicht sprach, und was doch die wichtigste Rolle bei Faust und bei Goethe spielt, das ist der Liebesakt, als Stimulans künstlerischen Schaffens, und wahrscheinlich ist es dies, worauf er am Ende der Tragödie anspielt.

Wissenschaft und Moral.

I.

280/14 Die experimentelle Biologie, die die Grundlage für viele der in diesem Werk auseinandergesetzten Ansichten bietet, beruht auf der Vivisektion der Tiere.

280/25 Viel delikater ist noch die Frage des Experiments am Menschen.

281/26 Vor kaum einigen Jahren hat eine Pariser Zeitschrift, „La Revue“, bei den hervorragendsten Schriftstellern eine Umfrage über die Vernunftmoral

ある25歳のとき、次のような発言をしている。

V.

私が思うに、むしろ、ゲーテのファウストによれば、人間は人生の大部分を自らの個性の完全な発展に費やすべきであり、それを人類の利益のために捧げるべきなのは、人生の後半、経験を通して成熟し個人としての満足を十分に得たときである。

しかしながら、彼〔ゲーテ〕が語らなかったことだが、ファウストやゲーテにおいて最も重要な役割を果たしているのは、芸術的創造を刺激するものとしての愛の行為であり、悲劇『ファウスト』の終局に彼が暗示したのはおそらくこのことであろう。

科学と道徳

I.

本稿で取り上げた多くの学説の基礎となっているのは実験生物学であるが、それは動物の生体解剖に基づいている。

より一層デリケートなのは、人体実験の問題である。

ほんの数年前、パリの雑誌『ラ・ルヴェ』が、最も優れた作家を対象に理性道徳について質問を行った。

veranstaltet.

281/35 Während ein Philosoph, Boutroux, behauptet, daß die Moral sich auf Vernunft gründet und keine andere Begründung haben kann, ruft ein Dichter, Sully Prudhomme, das Gefühl, das Gewissen als Grundlage der Moral an.

283/18 Das sexuelle Leben wimmelt von den zartesten Problemen, bei denen es sehr schwer ist, zu entscheiden, was das Moralische ist.

283/33 Und ebenso bei allen Fragen des Strafrechts.

284/4 Die utilitaristische Moraltheorie sieht sich also oft außerstande, das Gute zu beweisen, was aus der von ihr vorgeschriebenen Handlung hervorgehen soll,

284/12 Gegenüber so viel Schwierigkeiten haben viele Moraltheoretiker die utilitaristische Theorie für unbrauchbar erklärt und sich für die intuitive Theorie entschieden.

284/14 Die Moral sollte ihre Begründung finden in dem jedem Menschen eingeborenen Gefühl, in einer Art sozialen Instinkts, der dazu antreibt, seinen Nächsten Gutes zu tun, und der durch die Stimme des inneren Gewissens vorschreibt, wie man handeln muß, und das besser tut, als jede Erwägung über die Frage, was in einem bestimmten Fall nützlich sei.

哲学者のブートルーが、道徳は理性に基づいており他の根拠はありえないと主張しているのに対し、詩人のシュリ・プリュドムは、道徳の基礎として感情と良心とを数えている。

性生活は最もデリケートな問題に満ちており、何が道徳的であるかを決めるのは非常に難しい。

また刑罰に関するすべての問題も同様である。

このように、功利主義的道徳説は、しばしばそれが規定する行為からもたらされるはずの善を証明することができない自身を見出し、

多くの難問に直面して、多くの道徳理論家は、功利主義的理論は役に立たないと解し、直観的理論を採用した。

道徳の根底はすべての人間の生来の感情に存しているとされ、それは隣人に善をなすよう駆り立てる或る種の社会的本能であり、内なる良心の声を通してどのように行動すべきかを指示するが、こうしたことは特定の場合について何が有用であるかを考量することより優れているのである。

285/29 Wir müssen uns also an die Konsequenzen der Handlungen halten.

286/22 Andererseits ist der Nutzen wohl der Zweck jeder menschlichen Handlung; aber da es in einer großen Zahl von Fällen schwierig ist, ihn zu erweisen und genau zu bestimmen, ist es unmöglich, ihn als Grundlage einer Vernunftmoral zu nehmen.

II.

287/10 Nach dem Mißlingen mehrerer Versuche einer rationellen Begründung der Moral hat Kant seine Theorie aufgestellt, die vielen Denkern als ein wirklicher Fortschritt angesehen wird.

287/26 Die Kantsche Lehre ist eine intuitive Moraltheorie, nur daß ihr Prinzip nicht ein Gefühl der Sympathie und Liebe ist, daß uns anspornte, unsern Mitmenschen Gutes zu tun, sondern dieses Prinzip ist einzig das Pflichtbewußtsein.

287/37 Gerne dien'ich den Freunden, doch tu'ich es leider mit Neigung: Und so wurmt es mich oft, daß ich nicht tugendhaft bin.

(Die Philosophen, Gewissenskrupel.)

288/1 Um Kants Morallehre zu kritisieren, stellt Herbert Spencer sich eine Welt vor, die von Menschen bewohnt ist, die gar keine Sympathie zu ihren Mitmenschen haben und ihnen

よって、〔行為を評価するにあたっては〕私たちは行為の結果を気にかけなくてはならない。

別の側から言えば、効用は人間のすべての行動の目的であるかもしれないが、多くの場合、効用を証明し正確に定めることは困難であるため、それを理性道徳の基礎とすることは不可能である。

II.

道徳を合理的に基礎づけようとする試みが何度も失敗に終わった後、カントは、多くの思想家が真の進歩とみなしている彼の学説を確立した。

カントの教義は直観的な道徳理論であり、その原理は、同胞に善を行うよう私たちを駆り立てる同情や好意の感情ではなく、ただ義務の意識に基づく。

私は喜んで友人に奉仕する。だが残念ながら、私は傾向性とともにそうする。そのことは、自分は有徳でない、としばしば私を不安にさせる。

(「哲学者たち、良心の呵責」)〔シラーによるカントの諷刺詩〕

カントの道徳説を批判するため、ハーバート・スペンサーは、同胞に対する同情心を全く持たず、自然の本能に反して純粋な義務感からのみ善行をなす人間が住む世界を仮想している。

nur aus reinem Pflichtgefühl, im Widerspruch zu ihren natürlichen Instinkten, Gutes tun.

288/6 Es ist klar, daß ein moralisches Leben nach der Kantschen Theorie nur von Ausnahmemenschen geführt werden könnte, denn im allgemeinen gehorcht die Menschengattung mehr ihren Neigungen als ihrem Pflichtgefühl.

288/29 „Handle so, daß die Maxime deines Wollens zugleich als das Prinzip einer allgemeinen Gesetzgebung gelten kann.“

289/23 Es ist klar, daß Kant bei seinem Suchen nach einer rationellen Basis der Moral nur die äußere Form gefunden hat, in der der substantielle Inhalt der Sittlichkeit fehlt.

290/37 In sehr klarer Weise ist dieser Gedanke durch Vacherot ausgeführt worden,

291/30 die wahre Ordnung dieser kleinen Welt, die man Menschenleben nennt, das ist ihr Endzweck, ihr Gesetz.

291/38 Ein neuerer Kritiker Kants, Prof. Paulsen, kommt zu einem ähnlichen Schluß.

292/2 „...Die Moralgesetze sind Regeln, die zu einer Naturgesetzgebung des menschlichen Lebens taugen, das heißt Regeln, die, wenn sie als Naturgesetz das Handeln beherrschten, die Erhaltung und höchste Entfaltung

カントの学説に従った道徳的生活は、例外的な人々によってのみ導かれ得ることは明らかである。なぜなら、一般に人類は、義務感よりも傾向性に従うからである。

「あなたの意志の格律が常に同時に普遍的な立法の原理として妥当しうるように行為せよ。」〔カント『実践理性批判』〕

カントが、道徳の合理的根拠を模索する中で、道徳の実質的内容を欠いた外形だけを発見したことは明らかである。

非常に明確な形で、この〔カントの義務論を人間性と調和させようとする〕考えは、ヴァシュロによって実現された。

これ〔人間の本性を發展させること〕が人生という小さな世界の真の秩序であり、その究極の目的であり、法則である。〔ヴァシュロ『批判哲学についてのエッセイ』〕

最近のカント批評家であるパウルゼン教授も同様の結論に達している。

「... 道徳法則とは、人間の生活における自然的立法則である規範、すなわち、それが自然法則として行為を司るのであれば、人間の生活の保全と最上の發展につながる規範のことである。」〔パウルゼン『倫理学体系』〕

des menschlichen Lebens zur Folge haben würden.“

292/9 Ein moderner Autor, der das M o r a l p r o b l e m nach naturwissenschaftlicher Methode behandelt, Sutherland, bezeichnet als moralisch eine Handlungsweise, die sich durch eine der Kontrolle der Vernunft unterworfenen Sympathie leiten läßt.

292/13 Nach ihm soll diese Sympathie niemals ein größeres Glück anderer zugunsten eines weniger wichtigen, obgleich unmittelbarer Glückes opfern,

292/22 Und so muß bei dem moralischen Handeln im allgemeinen immer die Vernunft leiten, aus welcher Quelle auch dieses moralische Handeln selbst entspringt ob aus der Sympathie oder dem Pflichtgefühl, und deshalb muß die Moral auf wissenschaftlich festgestellten Tatsachen begründet sein.

III.

293/8 Obgleich moralisches Handeln hauptsächlich in den gegenseitigen Beziehungen der Menschen vorkommt, gibt es doch auch eine individuelle Moral.

294/28 Ich zitiere dieses Beispiel nicht, um wieder einmal jene banale Wahrheit zu wiederholen, daß die Mäßigkeit ein schöneres Alter sichert als die Unmäßigkeit, sondern um hervorzuheben, wie wichtig es ist, zu

scientific method by moral problems of the modern author Sutherland is, morality, rationality of the object of the sympathy by which the behavior is defined.

彼〔サザーランド〕によると、この同情は、たとえ目前のものであっても、重要性の低い幸福を優先して他人の大きな幸福を犠牲にするものではない。

このように、一般に道徳的行為においては、その行為自体が、同情からであれ、義務感からであれ、どのような淵源からであっても、常に理性が導く必要があり、したがって、道徳は、科学的に確立された事実に基づいていなければならない。

III.

道徳的行為は主に人と人との相互関係の中で生じるが、個人の道徳もある。

この例〔生活習慣の違いから寿命に差が出た兄弟の話〕を引用するのは、節度を守ることが不節制よりも良い老後を保証するという陳腐な真実をもう一度繰り返すためではなく、生の本能の発達は個人の発達の過程でしか起こらないというこ

wissen, daß die Entwicklung des Lebensinstinkts erst im Laufe der individuellen Entwicklung erfolgt.

294/34 Ich war bei den letzten Augenblicken meines älteren Bruders zugegen (er nannte sich Iwan Illitsch und hat für die berühmte Novelle Tolstois, „Der Tod Iwan Illitschs“, als Modell gedient).

295/21 Die individuelle Moral besteht also darin, das Leben so zu führen, daß man zu einer Vollendung des normalen Lebenskreislaufs kommt, und sie muß darauf abzielen, schließlich ein Gefühl möglichst vollkommener Befriedigung zu erreichen, was erst in einem vorgerückten Alter möglich ist.

295/33 Das Kind ist zwar Egoist, aber es hängt an seinem Beschützer; das ist der Beginn des Sympathiegefühls.

296/38 Hier nun wird ihr Kenntnis der Orthobiose nützlich sein, denn sie wird sie lehren, daß das größte Glück in der normalen Entwicklung des Lebenssinns besteht, die zu einem heiteren Alter führt, und schließlich zum Gefühl, genug gelebt zu haben.

297/20 Zu diesem Zweck ist es in seinem eigenen Interesse und im Interesse seiner Familie unbedingt notwendig, daß die Dienstboten gut behandelt werden.

297/36 Ein anderes Beispiel liefert der Zorn.

298/3 Luxuriöse Gewohnheiten sind

とを知るのがいかに重要であるかを強調するためである。

私は兄の臨終の瞬間に立ち会っていた（彼はイワン・イリイチと呼ばれ、トルストイの有名な小説『イワン・イリイチの死』のモデルとなった）。

それゆえ、個人の道徳とは、正常なライフサイクルを全うするよう人生を導くことであり、老年おいてのみ可能となる最も完全な満足感の最終的達成を目指さなければならないのである。

子供はエゴイストだが、彼はその保護者に依存する。これが共感の感情の始まりである。

ここで彼女〔子供を養育する母親〕のオルトビオスの知識は、穏やかな老年を迎え、最終的には存分に生きたという感覚へとつながる最大の幸福が、生の意味の感覚が正常に発達することにあると教えてくれるので、有用である。

この目的〔正常な生活〕のためには、自分の利益のためにも、家族の利益のためにも、使用人を厚遇することが不可欠である。

他の一例〔健康を害する要因〕は怒りによって提供される。

奢侈の習慣がしばしば健康にたいへん有

oft der Gesundheit sehr schädlich, wie jedermann weiß.

298/16 In der Bergpredigt, die die Moral des Christentums zusammenfaßt, wird jede moralische Handlung unter dem Gesichtspunkt irgendwelcher Belohnung oder der Vermeidung einer Bestrafung empfohlen.

298/32 Herbert Spencer legt ebenfalls in seinem Werk über die Moral (The Data of Ethics) großes Gewicht darauf, daß die moralischen Vorschriften, um allgemein anwendbar zu sein, nicht zu große Opfer vom Menschen fordern dürfen, denn sonst bliebe selbst die beste Lehre toter Buchstabe.

299/2 Anstatt Leuten, die vom Pflichtgefühl erfüllt sind und jede natürliche egoistische Neigung im Menschen bekämpfen, wäre die Welt von Leuten erfüllt, die moralische Handlungen aus „Neigung“ vollbrächten, und das würde eine „herrliche“ Welt geben.

299/15 In einem ihrer besten Romane, „Middlemarch“, schildert George Elliot die Seele einer jungen Frau, die voll Begeisterung, ihren Mitmenschen wohlzutun, erfüllt ist.

299/23 J.S. Mill erzählt in seinen Memoiren, daß er in seiner Jugend davon träumte, die Gesellschaft zu reformieren und alle Welt glücklich zu machen.

299/38 Da es unbestreitbar ist, daß

害であることは、誰もが知るところである。

キリスト教道徳の精髓である山上の垂訓においては、各々の道徳的行為が、報酬を受け取ることや罰の回避の観点から推奨されている。

ハーバート・スペンサーは、道徳に関する著作（『倫理学のデータ』）の中で、一般的に適用されるための道徳的規則は、あまりにも大きな犠牲を人々に要求してはならない、さもなければ最善の教訓でさえも死文のままになってしまう、という事実にも大きく重点を置いている。

人々が、義務感に満たされ、人間の利己的な傾向性と戦うのではなく、「傾向性」から道徳的な行為をなす人々で世界が満たされ、それが「栄光」の世界をもたらすだろう。

ジョージ・エリオットは、彼女の傑作小説の一つである『ミドルマーチ』の中で、同胞のために善行をなそうとする熱意に満ちた若き女性の魂を描いている。

J.S. ミルは回顧録の中で、青年期には、社会を改革し全世界を幸せにすることを夢見ていたと語っている。

文明の進歩とともに人類の大きな苦しみ

mit dem Fortschritt der Zivilisation die großen Leiden der Menschheit sich mildern und vielleicht sogar verschwinden müssen, werden die für ihre Abwehr nötigen Opfer sich ebenfalls verringern müssen.

300/18 Seit langem schon ist der Heroismus, der Abraham das Messer in die Hand drückte, damit er seinen einzigen Sohn dem Glauben opfere, unnütz geworden.

300/29 Also weder das Kantsche Ideal der tugendhaften Leute, die aus reinem Pflichtgefühl Gutes tun, noch Herbert Spencers Ideal von Menschen, die das instinktive Bedürfnis empfinden, ihren Mitmenschen zu helfen, werden in der Zukunft verwirklicht werden, sondern vielmehr das Ideal von Menschen, die sich selbst genügen und nicht erlauben werden, daß man ihnen Wohltaten erweist, wird die Menschheit der Zukunft verwirklichen.

[旧蔵本では、Also から verwirklichen. にかけての一文の両端に／が記され、7行にわたる当該文左側に縦線が施されている。]

IV.

301/19 Die menschliche Natur ist, wie die Natur der Organismen überhaupt, der Abänderung wohl fähig, und muß abgeändert werden nach einem Ideal, von dem jetzt die Rede sein soll.

301/29 Da das Brot das

は緩和され、おそらく消滅しなければならないということは否定できないので、それらを避けるために要する犠牲も減少しなければならない。

ずっと以前から、アブラハムの手にはナイフを持たせ一人息子を信仰の犠牲にしようとした英雄主義は無用のものとなっている。

したがって、純粋な義務感から善をなす高潔な人々というカント派の理想も、同胞を助けようとする本能的欲求を感じている人々というハーバート・スペンサーの理想のいずれも将来実現することはなく、むしろ、自己充足し、人から善行をなされるのを認めない人々という理想が、未来における人間性を実現することになるのである。

IV.

人間の本性は、一般の生物の本性と同様に変化し得るものであり、これから述べる理想に従って改良される必要がある。

パンは人間の主食であることから、人々

Hauptnahrungsmittel des Menschen bildet, suchte man seit langem, die Natur der Cerealien zu vervollkommen.

302/7 Er hat eine neue Art von Kartoffeln gezüchtet, durch die der Ertrag aus dieser Erdfrucht in den Vereinigten Staaten um 85 Millionen Franken im Jahre gestiegen ist.

302/37 Dieses Ideal, glaube ich, ist die Orthobiose, das heißt die Entwicklung des Menschen zum Ziel eines langen, tätigen und rüstigen Greisenalters, dessen Ende begleitet wird von dem Gefühl der Lebensättigung und der Todessehnsucht.

304/13 Nicht aus Werken über Botanik haben Rimpau und Burbank all ihre Kenntnisse geschöpft.

304/29 Das Greisenalter würde dann so zurückgeschoben werden, daß die Sechzig- bis Siebzigjährigen noch ihre ganze Rüstigkeit bewahren und nicht genötigt wären, Unterstützung in Anspruch zu nehmen, wie das heute in vielen Ländern der Fall ist.

305/6 Der Fortschritt der menschlichen Kenntnisse wird den Ersatz dieser Institution durch andere herbeiführen und es wird durch Leute von wirklicher Kompetenz die Anwendung der Morallehre geleitet werden.

306/21 Mir ist auch vorgeworfen

は長い間、穀物の性質を改良しようとしてきた。

彼〔ルーサー・バーバンク〕は新しい品種のジャガイモを生産し、アメリカにおけるこの作物の収量を年間8500万フラン増加させた。

この理想〔人性の理想〕は、オルトビオス、つまり、しまいには人生の満足感と死への希望が伴う、長く活動的で強壮な老年期の目標に向かって人間を発達させることだと、私は確信している。

リンバウ〔ヴィルヘルム・リンバウ〕とバーバンクは、植物学の研究からすべての知識を得たわけではない。

そうすると〔オルトビオスにより生活すると〕老衰は遅延し、60歳から70歳の高齢者はなお強壯で、現在多くの国でそうであるような扶助が求められることはないだろう。

人間の知識の進歩は、こうした制度〔普通選挙・世論・国民投票〕の他の制度への交代をもたらし、道徳説の〔実際の〕適用は真に適切な人々により先導されることになるだろう。

また、私の〔学的〕体系には「利他主義

worden, daß in meinem System „kein Platz für den Altruismus“ wäre.

306/34 Und so sehr ich auch überzeugt bin, daß in der Zukunft Betätigung verfeinerter Sittlichkeit wie Aufopferung des Lebens und der Gesundheit völlig oder fast unnützlich sein werden, ebenso überzeugt bin ich doch, daß auch in der gegenwärtigen Zeit der Altruismus noch immer leicht seine Betätigung finden wird.

307/32 Nicht weniger unberechtigt ist der mir gemachte Vorwurf, ich hätte mein System auf ein teleologisches, also metaphysisches Prinzip aufgebaut. Nach Parodi scheinen die Hypothesen eines physiologischen Alters und des natürlichen Todes „durchaus die Idee einer natürlichen Dauer des menschlichen Lebens mit einzubeziehen, das der Mensch nur infolge akzidentieller Ursachen heute noch nicht ganz vollenden kann. Metschnikoff gebraucht wiederholt den Ausdruck „normaler Lebenskreislauf“. Nun, sehen wir da nicht die alte teleologische Auffassung der Natur, die anfangs so energisch zurückgewiesen wurde, sich wieder einschleichen? Den Glauben, daß die Gattung eine notwendige Realität ist und einem genau definierten Typus, gleichsam einer besonderen Absicht der Natur entspricht? Und daß diese so etwas wie eine leitende Idee, ein Ideal hätte, das

の余地がない」と非難されている。

そして将来的には、生命や健康を犠牲にするような洗練された道徳の追求は、まったく、或いはほとんど無用になると私は確信するが、同様に、現代において、利他主義はまだ容易にその道を見つめることができるかと確信している。

私が、自らの〔学的〕体系を目的論的な、すなわち形而上学的な原理に基づいて構築したという非難も不当なものである。パロディ〔ドミニク・パロディ〕によれば、生理学的老年と自然死の仮説には「人間が、今日においてもただ偶然の要因により全うできない自然な寿命という考えが含まれているようだ。メチニコフは「正常なライフサイクル」という表現を繰り返し用いている。さて、古い目的論的自然観は当初メチニコフにより激しく拒絶されていたが、それが再び忍び寄ってきているように見えないか？

〔生物〕種は必然的な現実であり、自然の特別な目的に正確に照応した型であるという信念なのか？ そしてそれは主導的な理想の如きものであり、そうした理想は、環境により覆い隠されたり、歪められたりすることもあったが、今やその純粋な形に回復するはずであるということか？ それがないければ、個人とその環境との間には完全かつ一定のバランスが保たれていなければならないと主張できるのは、どのような権利があるからであ

die Umstände zwar haben verschleiern oder verderben können, das aber nun in seiner Reinheit wieder hergestellt werden soll? Denn ohne das, mit welchem Recht kann man da behaupten, daß ein völliger und ständiger Gleichgewichtszustand zwischen dem Individuum und seinem Milieu bestehen muß? Daß es einen normalen Lebenskreislauf gibt, daß die Disharmonien in eine Harmonie auflösbar sein müssen?"

308/20 Ich kenne die „Absichten“ und die „Motive“ der Natur nicht, und habe nicht mit einem Schritt metaphysisches Gebiet betreten.

309/1 Ich kenne die Absichten und das Ideal, die die Natur mit den Pflaumen verfolgt, durchaus nicht, aber ich weiß bestimmt, daß der Mensch solche Absichten und solche Ideale haben kann, die als Ausgangspunkt für die Umwandlung der Natur dieser Früchte dienen können.

309/29 Wenn die Natur sie nicht verschont hat, wie kann man wissen, ob sie nicht beabsichtigt, die menschliche Gattung ebenso zu behandeln?

ろうか? そうでなければ、個体とその環境との間には完全かつ一定の平衡が保たれているはずだと主張できるのは、どのような権利からなのか? 正常なライフサイクルがあり、不調和は調和に解決されなければならないということか?」

私は自然の「目的」や「動機」について何も知るところがなく、また一歩も形而上学的な領域には立ち入っていない。

私は、自然がスモモに対して持っている目的や理想を知らないが、そうした果実の性質を変容させる出発点となり得る意図や理想を人間が持っていることは確実に知っている。

自然が彼ら〔絶滅した類人猿〕を消えるにまかせたのだとしたら、人類を同様に扱うつもりがないかどうかということ、を、どうして知ることができようか?